

---

メインシンポジウム

## 「畜産学のレジリエンスと進化」

### Resilience and Evolution of Animal Science (REAS)

Chairperson: Hiroshi Yoneyama, Haruki Kitazawa, Michiru FUKASAWA, Hara Kenshiro, Kentaro Kato, Sanggun Roh

Tue. Sep 14, 2021 2:30 PM - 6:00 PM メインシンポジウム (オンライン)

MS-01 : 米山 裕

MS-02 : 北澤 春樹

MS-03 : 深澤 充

MS-04 : 原 健士朗

MS-05 : 加藤 健太郎

MS-06 : 盧 尚建

#### 【概要】

近年畜産領域におけるグローバル化とAIやゲノム編集の技術革新により、畜産業の進化が進みつつある。一方で、ヒトにおける新興感染症問題と同様に、例えば畜産動物においてもその対策は世界的課題となっている。人類が生存するために必要な動物性食品の供給を支える畜産業の将来は、その基礎となる畜産学のさらなる発展にかかっている。そのためには、多様な畜産研究領域の融合から「しなやかな強さ（レジリエンス）」を持った畜産学の進化が必要不可欠である。本シンポジウムでは、畜産業の展望に関する基調講演と畜産学の将来を担う若手研究者による融合研究紹介により、畜産学の将来について考える。

なお、本シンポジウムは公益財団法人伊藤記念財団の助成を受けております。

---

4:40 PM - 5:00 PM

#### [MS-05] 【講演3】

### 豚熱の現状および今後の防疫対策

\*Ken-ichiro Kameyama<sup>1</sup> (1. National Institute of Animal Health, NARO)

2018年9月に26年ぶりに発生した豚熱（CSF）はイノシシ間での伝播により現在もその発生域を拡大し続けている。感染防止の方策として、飼養豚には国産生ワクチン（GP生ワクチン）、野生イノシシには海外製のバイト（餌）ワクチンの緊急接種および散布が行われ、飼養豚では概ね期待通りの効果が得られているものの、イノシシ群での清浄化は地域レベルでも確認されていない。本疾病は世界各地に浸潤しており、ヨーロッパ諸国においても2000年代に広範囲な流行を経験した。彼国では狩猟・捕獲、餌ワクチン散布等によりイノシシからの感染の駆逐に成功しており、我が国の現状とは大きく異なる。このような違いが生じる最大の要因は地形だと考えられている。欧州ではなだらかな地形が続くのに対し、我が国では南アルプスを代表とする高い山地が本州を南北に貫いており、イノシシの狩猟や餌ワクチンの散布の障壁となっている。この為、十分な資材と人員が揃ったとしても短期間で清浄化を成し遂げることは困難であり、イノシシ間およびイノシシから飼養豚へのCSFの感染は今後も長期間に渡り継続されると考えられる。

一方、海を隔てた東アジアおよび東南アジア諸国ではアフリカ豚熱（ASF）の発生が継続しており、新たな悪性感染症が目前に迫っている。東欧では野生イノシシにおけるASFが5年以上持続していることから、国内のイノシシに感染した場合にはCSFと同様にイノシシ間での感染が持続すると想定される。さらにASFに対してはワクチンなどの有効な予防法は確立されていない。ASFの侵入を見据えると、CSF対策に於いてもワクチンに頼らない純粋なバイオセキュリティの強化による飼養衛生管理を実践していくことが必要と考えられる。施設等のハード面および衛生管理のルール、従事者の意識等のソフト面は互いに補完することが可能であることから、可能な範囲で改善を行い、農場バイオセキュリティを最大限に高めていくことが重要である。

